

東京言語研究所 2022 年度春期講座

| | | 課目 (講師) | |
|-----------------------|----------------|-----------------|--|
| 【1日目】 4月16日 (土) | 1限 | 言語学入門 (長屋尚典) | |
| | 2限 | 生成文法Ⅲ (斎藤衛) | |
| | | 社会言語学 (嶋田珠巳) | |
| | 3限 | 形態論、語形成論 (杉岡洋子) | |
| 音声学 (中川裕) | | | |
| 4限 | 認知言語学Ⅰ (西村義樹) | | |
| | 生成文法入門 (大津由紀雄) | | |
| 【2日目】 4月17日 (日) | 1限 | 認知言語学Ⅱ (池上嘉彦) | |
| | 2限 | 史的言語学 (堀田隆一) | |
| | | 認知語用論 (松井智子) | |
| | 3限 | 生成文法Ⅱ (福井直樹) | |
| 日本語文法理論 (尾上圭介) | | | |
| 4限 | 言語心理学 (杉崎鉦司) | | |
| | 意味論 (酒井智宏) | | |

1限 (10:00~11:20) 2限 (11:40~13:00) 3限 (14:00~15:20) 4限 (15:40~17:00)

※講義はオンライン (ライブ配信) で開催されます。いかなる場合も後日の録画視聴はできません。
 ※一日に受講できる課目は最大4課目までです。同時刻に開催される講座はどちらか一方を選択していただきます。

開催日時：2022年4月16日 (土)、17日 (日) 10:00~17:00

受講形態：ZOOMによるオンライン講義 (ライブ配信のみ)

受講料：土日どちらか一日受講の場合：5500円、両日受講の場合：11000円 (税込) ※事前振込

申込期間：3月4日 (金) AM10:00~4月11日 (月) AM10:00まで

申込の流れ：1. 申込期間内に研究所の公式ウェブサイトの申込欄に必要事項を記載し送信する。

2. 1を送信後に戻ってくる自動送信メールの振込先に従い、4月11日 (月) までに振込手続きを完了する。

| | | 講義概要（講師名・所属） |
|-------------------------|-----|---|
| 1 日目 4 月 16 日 (土) | 1 限 | <p>言語学入門：会話の言語学 (長屋尚典／東京大学准教授)</p> <p>2022 年度私が理論言語学講座で担当する「言語学入門」では、今年が国際連合総会によって宣言された「国際先住民言語の 10 年 International Decade of Indigenous Languages」の 1 年目であることを踏まえて、この地球で話される言語の多様性について考えていこうと思います。そのことを通して、言語の多様性の美しさと不思議さを理解するための言語学の「めがね」とその使い方を勉強していくつもりです。</p> <p>春期講座では、そんな言葉を観察する「めがね」への招待として、会話をめぐる現象をとりあげたいと思います。長らく言語学の研究では本や新聞で読むようなきれいな「文」に注目し、その分析が主に行われてきました。というのも、会話には言い間違いや言い直しなどがたくさん生じたり、「えっと」などの意味を持たない（ように思える）要素が含まれていたりして、そのようなものを「ノイズ」だと考えてしまった人たちが多かったからです。しかし、我々が言葉を使用するのも習得するのも会話においてです。会話の言語学をきちんと考えることなく言語のことがわかるでしょうか。</p> <p>こうして今回の講座では会話の言語学に焦点をあて、「質問に回答するのにかかる時間は平均 200 ミリ秒ぐらいである」「質問に対する否定的な回答は肯定的な回答よりも遅くなる」「60 語に一回は “um” や “uh” のような要素を発する」「どの言語も “huh” という単語を持つ」などの会話の特徴を考えていきます。</p> <p>さらに、私自身の研究からタガログ語の疑問詞 <i>ano</i> ‘what’ の振る舞いも紹介したいと思います (Nagaya 2022)。この語は疑問詞なのでもちろん WH 疑問文に使われるのですが、しかし、実際の会話を観察するとこの語が WH 疑問文で使用されるのはむしろ稀で、“placeholder” (思い出せない単語や言いにくい単語のかわりに使用する) や “filler” (会話の隙間を埋める) としての用法がほとんどであり、疑問詞の分析に会話の分析が不可欠であることがわかります。</p> |
| | 2 限 | <p>生成文法Ⅲ：カートグラフィーは、何の記述なのだろうか？ (斎藤衛／南山大学教授)</p> <p>Luigi Rizzi 氏のイタリア語の分析に基づく研究 (1997) に端を発し、カートグラフィー研究は大きな成果をあげてきました。文周縁部には、談話小辞、補文標識、主題、焦点、モーダル、さまざまな副詞句などが生じますが、カートグラフィーの基本的な考えは、これらが綺麗な階層構造をなすというものです。では、その階層構造にどのような説明を与えることができるのでしょうか。極小主義アプローチの下では、文構造は、2つの要素から自由に構成素を形成する「併合」により生成されます。しかし、併合により生成される構造がすべて許容されるわけではありません。語彙の形態的選択制限、意味的選択制限、意味解釈の整合性などにより、文法的に適切な構造が決定されます。本講義では、日本語の補文標識の分析、Rizzi 氏の焦点句の分析、遠藤善雄氏の談話小辞の分析、上田由紀子氏のモーダルの分析を参考にしつつ、カートグラフィー構造を説明する可能性について考えます。また、説明を追求した場合に、カートグラフィー構造の一部が、綺麗な階層性ではなく、極めて複雑な形となることを示します。</p> <p>社会言語学 (嶋田珠巳／明海大学教授)</p> <p>「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこしお堅いイメージも、「社会」言語学になるとどこことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるのでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。</p> <p>そもそも、ことばは人が話すもの。言語を理解するのに、人を、そしてコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういったところから展開されます。この講義では、社会言語学とはどのような学問領域かを概説したうえで、とくに言語接触、言語変化における話者の関与について考えます。</p> <p>今年度の理論言語学講座「社会言語学」では、後期に「言語の社会関与性」というテーマで講義を担当します。言語接触と文法、さらに言語とアイデンティティ</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>ィの諸問題に今年度は深入りする予定です。「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力を春期講座でも感じていただけたらと思います。</p> |
| 3限 | <p>形態論、語形成論：複合語の多様性からわかること (杉岡洋子／慶應義塾大学名誉教授)</p> <p>形態論は語という単位の成り立ちや性質を研究する分野です。理論言語学講座（後期）「形態論・語形成論」では、さまざまな種類の語形成を観察・分析しながら、語という単位の言語における位置付けや、その産出と理解のしくみについて考える予定です。</p> <p>春期講座ではその導入として、複数の語を組み合わせる語を作る「複合」という語形成を取り上げます。ジャッケンドフという言語学者は「車イス」やwheel chairのような複合語を、「プロト言語の化石」と呼び、語と語が文法（統語規則）を介さずに意味だけで結びつく複合語は言語の原始的な姿を示すと指摘しました。たしかに、「猫グッズ、猫カフェ、猫トイレ、（トトロの）猫バス」といった複合語内の意味関係は、統語の規則や原理から説明できそうにありません。しかし、さまざまなタイプの複合語を見ると、この指摘に合わないものもあり、複合という語形成には、統語・意味・語用という言語の複数の側面が関わることがわかります。複合語の多様性は言語のしくみの豊かさに根ざすものである可能性を示して、語形成の探求への入り口としたいと思います。</p> |
| | <p>音声学 (中川裕／東京外国語大学教授)</p> <p>春期講座では、2022年度開講の2つの音声学講座「調音音声学」（前期）と「フィールド音声学」（後期）で取り扱う内容の要領を紹介しながら、音声学の基礎知識と技能を身につけるための勘所を講義します。</p> <p>「調音音声学」では、聞いたこともない言語音や、日本語や英語にあるのにこれまで気づかなかった微細な発音の区別を、正しく聞き取り、真似して発音し、さらに音声記号で表記する力を身につけます。ここでは、発音を聴き、発音動作を視察し、発音を模倣して自分の発音感覚を内省する、という主観的観察の実習を行います。この実習で、発音器官がどんな仕組みで働いているかを感覚的にも理解できるようになります。春期講座では、講義前半にこの調音音声学のエッセンスをお話しします。</p> <p>未知の言語の音声的調査を行う「フィールド音声学」では、「調音音声学」で養った主観的観察力が不可欠ですが、調査で複雑な珍しい音の区別が発見され、それを報告しようとする、観察の確からしさを判断するための客観的な手がかりが記述に盛り込まれていることが期待されます。講義後半では、手軽に使える器械音声学的な客観的観察法のいくつかについてその要点を解説します。</p> |
| | <p>認知言語学Ⅰ：認知文法入門 (西村義樹／東京大学教授)</p> <p>日本語や英語のような個別言語をそれぞれの言語の母語話者が適切に使用することができるのは母語話者にどのような（大部分は意識されない）知識が備わっているからなのでしょう。この知識はヒトのもつ他の知識や能力とどのように関係しているのでしょうか。文法に関する知識と意味に関する知識、語彙的な知識と文法的な知識は相互にどのような関係にあるのでしょうか。認知文法（cognitive grammar）はこれらの問いに答えることを目標とする理論の1つです。本講義では、認知文法がこの目標をどのようにして達成しようとしているのかを、認知文法の創始者である Ronald W. Langacker の著作から厳選した文章を深く正確に読み解くことを通して明らかにします。英語が得意でない人にも原典に真剣に取り組むことの意義と楽しさを十分に共有していただけるように努力します。（同じく「Langackerを読む：認知文法の基礎から最前線まで」と題した今年度後期の講義は認知文法の基礎から最前線までが見渡せる構成にする予定ですが、本講義はその予告編の役割も兼ねています。）</p> |
| | <p>生成文法入門 (大津由紀雄／関西大学客員教授)</p> <p>生成文法に関する予備知識はほとんどないが関心があるという人々を対象に、生成文法はなにを目的とし（「なぜ生成文法をするのか」）、なにを目標としているのか（「なにを目指しているのか」）についてできるだけわかりやすくお話しします。</p> |
| 4限 | |

| | |
|--|---|
| | <p>言語生物学 (biolinguistics) としての性格を明確に表した現在 (いま)こそ、生成文法がこれまでにとってきた研究戦略を正しく理解し、今後の課題を見定めるべき時期と言えます。つまり、生成文法入門最適期というわけです。その辺りのこともお話します。</p> <p>この講義は今年度の理論言語学講座の「生成文法入門」の予告編という意味合いもあるので、そこではどんなことを、どんな予定で講じる予定であるのかについてもお話します。</p> |
| <p>2 日目 4 月 17 日 (日)</p> | <p>認知言語学 II (池上嘉彦 / 東京大学名誉教授)</p> |
| | <p>「認知言語学 II」では、一昨年後期から筆者の『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』(大修館書店、1981)と題した著作を念頭に、そこで取り上げているさまざまな問題点を現代の認知言語学の観点から出来るだけ広い視野の中に置いて検討、評価するという形でお話しています。昨年度には、途中、学際的に関連すると思われる政治学者、丸山真男の著名な論考「歴史意識の『古層』」の一部に言及する機会を持ちましたが、その際、思いがけなく、いくつかの新しい<気づき>が得られたように思われます。講演では、その中で特に二つの用語をめぐっての考察をお話させていただきます。一つは、国造り神話の類型としての<つくる>—<くむ>—<なる>という概念系列で用いられる<なる>、もう一つは、日本の歴史意識の古層を特徴づけるとされる<なる>/<つぎつぎ>/<いきおい>という概念類に含めて提示されている<いきおい>と、という用語です。</p> |
| | <p>史的言語学：英語史でみる英語語彙の世界性 (堀田隆一 / 慶應義塾大学教授)</p> |
| | <p>英語は日本語に勝るとも劣らず借用語の多い言語です。英語語彙の 2/3 ほどが他言語からの借用語で占められており、本来の英単語は 1/3 にすぎません。語彙に関する限り、英語はもはや英語ではないといってよいほどです。では、なぜこのように借用語が多いのでしょうか。その理由は、英語は歴史的に多くの言語と接触し、そのたびにそれらの言語から様々な影響を受けてきたからです。その影響は音声、文法、書記などの諸分野に及びますが、とりわけ語彙分野で顕著でした。</p> <p>英語の歴史は伝統的に 449 年に始まるとされますが、英語はそれ以前の大陸時代においてもすでにラテン語などから語彙的影響を受けてきました。その後、古英語期 (449~1100 年頃) には引き続きラテン語、加えて古ノルド語とも接触し、中英語期 (1100~1500 年) にはフランス語や他のヨーロッパの言語と密な関係をもちました。続く近代英語期 (1500~1900 年) にはラテン語、ギリシア語、そして世界中の諸言語から多くの単語を借用し、現代英語期 (1900 年~) に至ります。</p> <p>本講義では、英語語彙に注目し英語史のダイジェストを示します。</p> |
| <p>認知語用論 (松井智子 / 中央大学教授)</p> | |
| <p>語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について検討し、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入とします。</p> <p>言外の意味の理解をも可能にする語用能力を支えるのは、相手の心のうちを読み取る推論能力です。これは、哲学や心理学で「心の理論」と呼ばれる能力と近いと考えられています。本講義では、この心の理論の発達途上である子どもや、心の理論に障害があるとされる自閉スペクトラム症児・者のコミュニケーションの困難さに触れながら、語用能力とは何か、考えていきたいと思えます。</p> | |
| <p>生成文法 II：「生成文法の企て」概観 (福井直樹 / 上智大学教授)</p> | |

| | |
|-----|--|
| | <p>理論言語学講座（生成文法 II）で行なわれる先端的議論の背景にある、「生成文法の企て」の全体像を概観します。この講義に関するかぎり、生成文法に関する予備知識は必要ありません。</p> <p>「生成文法の企て」とは、人間言語の根本特性の研究を通して、最終的には人間の「心のサイエンス」を構築しようとする知的試みです。この試みは、Noam Chomsky を中心にして 1950 年代に開始され、現在に到るまで精力的に追究されていますが、Chomsky がこの試みを開始した知的背景、現在に到るまで研究を導いてきた主導理念などをこの講義では概観したいと思います。そういったことを正確に把握することによって、「生成文法 II」で考察する生成文法理論の先端的議論も、より適切に理解できると思うからです。</p> <p>参考文献として酒井邦嘉（編著）（2022）『脳と AI - 言語と思考へのアプローチ』中公選書を挙げておきます。第 2 章、第 3 章が言語に関するディスカッションですが、特に第 3 章に関連する議論があります。</p> |
| | <p>日本語文法理論</p> <p style="text-align: right;">（尾上圭介／東京大学名誉教授）</p> |
| 3 限 | <p>文法に関する思索のおもしろさは、「なぜ」を問うところにあります。その「なぜ」の 90 パーセントは、下の (A) (B) のいずれかであります。</p> <p>(A) 言語の根源的大問題をめぐって、「なぜ」を問う。 (A-1) どの言語にも品詞として名詞と動詞がある。なぜか。 (A-2) 文（述定文）に主語と述語があるのはなぜか。 (A-3) 述語がなくても文としての意味を伝えうるのはなぜか。 〈述定文と非述定文〉 〈すべての文で、文の意味とは存在承認か希求〉 (A-4) 述語の文法的意味として、過去・現在・完了などの時間性と、推量・意志・可能性などのモダリティ（非現実領域の事態を語るときの意味）とがある。なぜか。そもそもモダリティとは何か。 〈現実界存在と非現実界存在〉 (B) 日本語の個別文法形式の多義性に関して「なぜ」を問う。下はその一例。 (B-1) 動詞スル形が多義性の由来（眼前の運動の描写・命令・主語の性質など） (B-2) 動詞シヨウ形が多義性の由来（〔終止法〕推量・意志・勧誘・命令、〔非終止法〕未実現・可能性 など） (B-3) ラレル形述語の多義性の由来（可能・意図成就・自発・尊敬・受身など） (B-4) 係助詞ハの多義性（題目提示・対比・当該事態への集中など）の由来、モの多義性（列記不能なぐらい多様）の由来 ○ (B) の「なぜ」は、その文法形式固有の語性と結果的に表す意味（用法）を峻別して、語性から論理的に用法を導き出すという方法によってこそ説明できる。 〈語性用法派〉の観点。母国語文法研究の優位性。 ○ (A) (B) 両方を理解するための見解として、文の意味とは、大きく言ってしまえば〈存在承認〉か〈希求〉であると視点が必要。</p> |
| 4 限 | <p>言語心理学：はじめての言語獲得研究</p> <p style="text-align: right;">（杉崎鉦司／関西外国語大学教授）</p> <p>日本語を母語とするおとなは皆、「なぜその箱を開ける前に太郎は手を洗ったの？」と尋ねられた際、尋ねられているのは「太郎がその箱を開ける理由」ではなく「太郎が手を洗った理由」であると判断することができます。私の過去の研究において、調査方法を工夫することにより、日本語を母語とする4歳児がこのような質問に対してどのような解釈を与えるかを調査してみたところ、おとなと同様に、上記の質問は「太郎が手を洗った理由」を尋ねる疑問文であると解釈することが明らかになりました。生後4年しか経っていない子ども達がなぜおとなと同じ解釈のみを与えることができるのでしょうか。生成文法と呼ばれる言語理論では、人間に生まれつき備わっている母語獲得のための内的メカニズムが存在し、母語知識の獲得においては（生後に取り込まれる言語情報に加えて）その仕組みが重要な働きを担っていると考えます。この授業では、生成文法理論に基づく母語獲得研究の基本的な考え方とおもしろさを、上記のような事例をもとにわかりやすく説明したいと思います。</p> <p>意味論：意味論への招待</p> <p style="text-align: right;">（酒井智宏／早稲田大学教授）</p> <p>意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつき</p> |

にくい分野です。理由はいくつかありますが、一つだけあげると、意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単には言えませんが、がんばればある程度観察することができそうですし(音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます(語用論)。これに対して、「三毛猫」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよ、と言われても、どこを観察すればよいのか見当もつかないでしょう。

このようなときには、「意味」を探すことをいったんあきらめて、「意味を理解するとはどういうことか」を問うという方法があります。「三毛猫」という語を理解している人と理解していない人では何が違うのでしょうか。そもそも「理解している vs. 理解していない」の二分法は正しいのでしょうか。

春期講座では、どの立場に立つにせよ「意味の理解」について最低限心得ておきたい問題の一端にふれてみたいと思います。